岩倉使節団150年に寄せて
——米欧亜回覧の会が取り組んできたこと

泉　三郎

『回覧実記』に「文明」を読む

このすばらしい舞台にお呼び下さったことにまずお礼申し上げたい。「日本文明の再構築」というタイトルでシンポジウムを開催できるところは、日本では日文研以外ないのではないか。今回は「モアモア文明から適適文明へ」——英語で書くと、How to live well with modern civilization ——これでお話ししたい。

最初に、150年前の西洋文明と日本文明について考えてみたい。150年前の西洋文明を見たのは岩倉使節団、そしてそれを記録したのは久米邦武。よって久米邦武の文章の中から幾つかを拾い上げて紹介したい。まずアメリカへ渡り、西部劇の舞台まで足を伸ばした。大陸横断鉄道で進んだのだが、それは文明の発展段階を少しずつ見ていくような感じだったという。終着のニューヨークまで行ったらすごい文明を目の当たりにし、久米は仰天した。「いやいや、イギリスへ行ったら、もっとすごいよ」と聞かされて、実際行ってみたところ本当にすごい。イギリスには123日も滞在した。この長期滞在の間、イギリスの産業革命以降、どういうふうな段階的進行があったかというのをつぶさに観察し、理解するに至った。久米はこう書いている——「当今、ヨーロッパ各国皆文明ヲ輝カシ、富強ヲ極メ、貿易盛ンニ、工芸秀デ、人民快美ノ生ニ悦楽ヲキワム」。「悦楽」という言葉を使っていることに注意したい。この状況を目撃すれば、欧州各国の進展は段階を追って積み重ねてきたという経緯が分かるという。そしてその状況をさらによく見ると、大体50年から40年前は何もなかったことに気づくに至った。従って、日本とイギリスの差は、40年ぐらいではないかという思いに及んだ。わずか40年にすぎないとは、「よく言ったものだ！」という感じを私は持つ。

「巴里ニアレバ人ヲシテ愉悦セシム」

次いで使節団が向かったのは、フランスだった。フランスは使節団に好印象を与えたようだ。久米が書いているところによると、フランスには60日滞在したが、ほとんどパリにしかいない。パリを十分楽しんだのだろう。宿は凱旋門に面する3階建ての瀟洒な

建物、元トルコの公使館だったところ、そこをゲストハウスとして貸してくれた。久米は窓から見て、「景色爽快ニシテ、絵ノ如シ」と表現した。街を回覧すると、行き交う人々は楽しそうに思えた。パリは楽しそうに遊んでいる――至るところにレストランがあり、カフェがあり、それでシャンゼリゼの界隈には音楽堂があって、軽快な音楽が流れている。ルノワールの絵のような、ああいう風景のところへ彼らが入っていく。ちょうどクリスマスの時期に当たっており、そういう雰囲気の中へ入っていく。久米は「パリは天国のようだ」とも言っている。久米の表現ではあるものの、彼一人の思いではなく同行者もそう思ったに違いないだろう。

ここで文明についての記述を少し紹介したい。文明が進むとは、食衣住の順序で豊かになっていくこと。そして、求める力点が、「量」から「質」に変わっていく。また、より贅沢に美的になっていく。こういうふうに久米は表現している。またこうも書いている――「倫敦ニアレバ人ヲシテ勉強セシム、巴里ニアレバ人ヲシテ愉悦セシム」。ロンドンの街は繁栄の頂点にあり、喧騒甚だしく、馬車もバーッと通る。当時地下鉄がすでに完成していたし、高架の鉄道も走っている。人が歩いているスピードが速い。足が地につかないほど速いと久米は書いている。ところが、パリへ来ると、みんなゆったりしている。パリへ来ると、何か離れ座敷に来たような雰囲気になったのだろうと思うのだが、それを一言で「倫敦ニアレバ人ヲシテ勉強セシム、巴里ニアレバ人ヲシテ愉悦セシム」。勤勉なロンドン、その一方、愉悦のパリ、この表現が実に素晴らしい。

訪日外国人が見た幕末・明治日本

視点を変えて、当時の日本を外国人はどう観察したかについて考えてみよう。渡辺京二さんが『逝きし世の面影』にいろいろ書いているのが参考になろう。幾つか紹介してみたい。米国のハリス総領事が下田界隈の風景を次のように描写している――「人々は楽しく暮らしており、食べたいだけ食べ、着物にも困っていない。それに家屋は清潔で日当たりも良く、気持ちが良い。世界のいかなる地方においても、労働者の社会で下田におけるよりもっと良い生活をしているところは見たことがない」。ハリスは元来商人ゆえ、あちこち見てきており、その体験でこう話している。1872 年に法律顧問として来日したブスケの観察は次のようなものだった――「（日本人は）必要なものは持つが、余計なものを得ようとは思わない」。また、仕事をしている間にもたばこを吸ったり、しゃべったりしていて、気楽にやっている。一家を支えるにはほんのわずかな所得でいい。こういうふうにブスケは見て書き記した。

少し時代を下って 1889 年（明治 22 年）の事例は、英国の詩人でエドウィン・アーノルド。この人は随分歓迎されたらしくて、歓迎会の席上でこんなことを言っている――「日本の景色は妖精のように優美で、美術は絶妙であり、その魅力的な態度、礼儀正しさは、もう天国あるいは極楽に最も近づいている国である」。ちょっと褒め過ぎに思えるが、で

もそういう感想をアーノルドに持たせた証左になっていよう。「あなた方（歓迎会参加の日本人）の文明は、隔離されたアジア的生活の落ち着いた雰囲気の中で育ってきた文明であり、競い合う諸国家の衝突と騒動の中に住む我々欧米人は、命をよみがえらせるような安らぎと満足を日本は与えてくれる」とも書き残している。

「モアモア」から「適適」へ

ここで岩倉使節団から150年後の日本に目を転じてみたい。現在の令和の日本を、みなさん、どう思うだろうか。私には、もう20～30年前から極楽と思えるくらいだ。次から次へといろいろな新しいものが生まれているけれども、そんなもの要らないというか、なくても今あるものだけで十分幸せになると思うくらいの日々を過ごしてきた。その20～30年間でいろいろ新しいものを作り――スマホはその最たるもの――こんなに豊かで便利で、コンビニへ行ってもショッピングモールへ行っても、商品があふれているではないか。それに有形の「もの」だけでなく「情報」も。テレビを見てもスマホを見ても、あふれるように情報が出てくる。一流の音楽、スポーツ、旅の番組やら多種多様だ。オペラ好きにはオペラ、歌舞伎を観ようと思ったら歌舞伎。しかも無料同然。こういう意味で、考え方にもよるけれども、もう豊かさの度が過ぎているという感じさえ私は抱いている。

何事もそうだが、「過ぎたるは及ばざるがごとし」である。これは孔子の言葉だと言われており、度を過ぎたら悪になってしまう。豊かさが溢れる現代の世を目の当たりにして、何かもっともっと、モアモア（more & more）の代わりになる言葉はないかなと思っていて思いついたのが、「適」という語だった。

やや極言するならば、文明というものは道具であろう。どんな大きくても小さくても、ソフトであれハードであれ、極端に言えば宗教でさえ道具、哲学も道具、と考えられよう。人間の原始的な状態と今とを比べてみると、原始的な状態ではそのような道具は何もなかったけれども、古代の人もそして中世の人も結構楽しく幸福に暮らしていた。なので、極端に言うと文明などなくとも――あったほうがもちろんいい！――ほどほどにしておいたらどうなのか、と。「適度」というものがあるであろう。ここに、私が「適」という言葉を提唱する起点がある。また、幸福についても、幸福って一体何だろうか。さまざまな人が幸福度を測るのにいくつもの項目を挙げ、点をつけ、トータルして評価する。けれども、もっと直感で体感する幸福の感覚があるはずだと私は思う。

中国の四千年の歴史、あるいは五千年の歴史を眺めてみるならば、その中で抽出されてきた幸福の条件は、五福と言って五つある。中国では福禄寿と言う。禄はマネー、寿は健康、ヘルシーにつながっている。一方、アメリカ人はどう考えているか。アメリカにはギャラップ（Gallup）の調査、アンケートがある。幸福の証明としては5項目が挙がっている。中国同様に五つに収斂されている。中国と似ているのだが、大きく違うの

は、中国の場合は徳とか仁、あるいは「利他」の精神、思いやり、これが徳。さらにもう一つは天命。

五福に至る際に、「モアモア（more & more）」に代わる言葉はないかなというので、「適」という言葉を思いついたのだが、それを五福にならってさらに五つにすると、「快適」。それから、一番分かりやすいのは「量」と「質」。こういうものがある。薬もさじ加減で、いい量を与えれば毒が薬になる。逆にオーバーに与えたら毒になる。お湯加減はもちろん誰もが分かっている。それから、適時、適所、適材適所。「適」という言葉は多方面に適用できると思う。「適」というのを考えない西洋の文明は、特にアメリカは直線的にもっともっと――「モアモア（more & more）」――である。もっと進歩しよう、もっと経済を発展させよう。だが経済成長は、ある程度まで進めば飽和状態になるのだから、経済はこの程度で結構――「適」――と。何にでも適度というものが存在する。このことを是非考えていただきたい、というのが私の提案の一つである。そして、「モアモア（more & more）」から転じて「適適」文明のほうへ何とか行けないものかと思案している思いを最後にお伝えして、結びとしたい。

参考文献

久米邦武編、田中彰校注『特命全権大使 米欧回覧実記』〈全 5 巻〉（岩波書店、1985 年）。
渡辺京二『逝きし世の面影』（葦書房、1998 年／平凡社ライブラリー、2005 年）。